栃尾紬アーカイブの構築

Construction of Tochio Tumugi archive

菊池加代子 / 小林花子

KIKUCHI Kayoko / KOBAYASHI Hanako

キーワード
織物、栃尾紬、絹織物、着物、繭

Keywords
Textile, Tochio Tumugi, silk weave, kimono,cocoon

In Tochio, Nagaoka City, Niigata Prefecture, silk fabrics have been woven for a long time. From sericulture, thread making, dyeing, and weaving were done at home to cover the clothes worn by the family. This study is a record of a very beautiful cloth called Tochio Tsumugi.

はじめに

新潟県長岡市栃尾では､｢栃尾紬｣と呼ばれる絹織物が作られていた。

家内で自給自足の布として作られていたものが、江戸時代には栃堀村の村庄植村角左衛門により絹織物生産を奨励し、農家の副業として織られ、家内で技術を伝えながら栃尾地域に広く生産が行われた。生産は昭和時代の中頃まで行われていたが、栃尾地域の織物産業は化学繊維の先染め織物産地と変化し、絹織物は衰退した。

本研究は、｢栃尾紬｣を栃尾の織物の歴史と地域の遺産として再認識し、その魅力と価値や技術、それらが行われてきた背景などを後世に伝えることを目的とし、この地域で育まれた手織物と絹文化にまつわる資料と発掘、調査し記録することを 2020 年より 3 年計画で行う。

本報告は、2 年度目の報告である。研究の中核をなすものとして長岡市栃尾美術館（以後、栃尾美術館）で開催した「栃尾の手織物と絹文化 2021」を中心に収集できた情報を記す。（菊池）

1.「栃尾の手織物と絹文化2021」 概要

1.1 展覧会概要

名称　長岡市栃尾美術館「見て！知って！ NAGAOKA コレクション展」 特別企画「栃尾の手織物と絹文化 2021」

会場　長岡市栃尾美術館　展示室Ⅱ、1 階エントランス付近

会期　2021 年 7 月 17 日(土)～ 9 月 5 日(日)

主催　栃尾の手織物と絹文化研究会（長岡造形大学 菊池･小林研究室）

協力　長岡市栃尾美術館・長岡市立栃尾南小学校

後援　長岡造形大学・栃尾織物工業協同組合・かざぜん株式会社

1.2 展示内容

2020 年の「栃尾の手織物と絹文化」展に続き、情報提供の呼びかけを主な目的とした展示を計画し、栃尾美術館の企画展の併催展として実施した。ここまでの調査で新しく確認された資料を中心に、個々の歴史と背景が見える展示を目指した。

特に､織物については作者が確認できているものの展示を目標とし、織り手にまつわる聞き取り調査の内容を同時に紹介することで、今も記憶にしっかりと残っている生きた情報を紹介したいと考えた。

研究開始当初から、一之貝には数件の織り手とその家族から直接話を伺う機会があり、その過程で中野タケノ氏（92 歳）が使用していた機道具がその家族と長岡市立栃尾南小学校によって保管されていることが判明した。中野タケノ氏と母の故五十嵐ツネ氏、その家族から提供された情報は、養蚕から糸作り、染め、手織の一貫の工程が見える資料、織物の数々、生活の記録が揃い、非常に貴重なものである。これらを展示の中心に据え、一之貝、荷頃、栃堀、西中野俣、西之俣、大野、菅畑など養蚕、手織物が盛んに行われていた地域をできるだけ多く紹介し、これまでの調査の中で手がかりの少ない地域への関心を持ってもらえるような展示構成を試みた。

2021 年の展示のもう一つの見どころには、明治・大正・昭和期に各地域で養蚕～手織が盛んに行われていた様子がわかる写真、紙資料（養蚕講習の記録、織構成を記したノート、帳面、葉書など）、書籍*1、掛軸*2、雑貨などがある。それらの展示には聞き取りをした内容を整理し要約した文章、所有者が書き綴ったエピソードを添えた。

fig.1 美術館企画展フライヤー表面

fig.2 ポスター

fig.3 フライヤー裏面

fig.4 展示室Ⅱ展示風景
奥に中野タケノ氏（一之貝）の機道具と織物の数々、中央には多田家（一之貝）の箪笥（着物、多田家の歴史がわかる書類、写真、雑貨類など）と養蚕と糸作りの道具、左手には掛け軸（菅畑）、写真、書籍など資料を中心に構成した。

fig.5 展示室Ⅱ展示風景展示ケース側
右手展示ケース内には、右手から栃堀、荷頃、中野俣、西之俣、一之貝で作られた織物（着物、反物、端切）、それぞれの織り手の紹介やエピソードを添え、展示した。

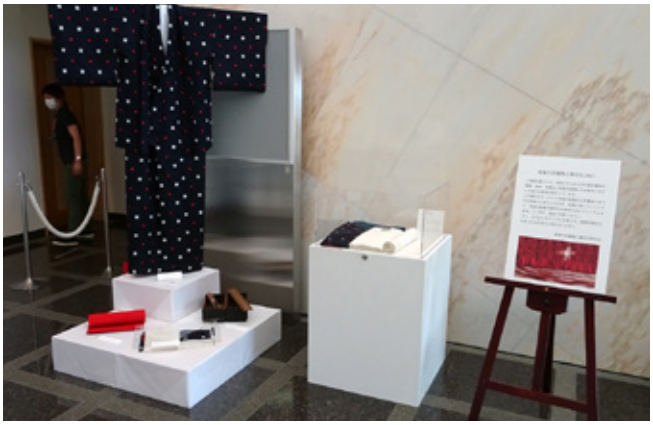

fig.6　1階エントランス展示風景
１階エントランス付近には展示紹介パネルと五十嵐ツネ氏（一之貝）の織物、道具類、織構成の記録ノートなどを展示し、２階展示室への導入に繋げた。

2020 年の展示では一之貝絣の作業工程を小学生が見学する様子を旧一之貝小学校教諭が撮影した VHS 映像[*3]「蚕から糸つくり、機織りまで（60 分）」を DVD に変換したものに最低限の補正を行い上映したが、鑑賞者から長すぎて全体を鑑賞することができないとの意見が多く聞かれた。撮影者に許可を得て、今後の展示と調査の際に有効活用する目的で長岡造形大学の視覚デザイン学科の学生に編集を依頼し、作業工程ごとに短い解説を挿入した短縮版[*4]を作成、上映した。

fig.7 展示部分　写真、紙資料、雑貨類

fig.8 展示部分　所有者によって書かれたエピソードを添えて展示

出品内訳：着物類 30 点、帯類 3 点、着尺 6 点、端切 4 点・1 組（117 点）、道具 9 点、機織道具一式 2 組、素材 1 点、写真 8 点、書籍 7 点、賞状 1 点、掛軸 1 点、映像 1 点、記録帳 4 点、箪笥一式 2 組、その他資料 6 点

1.3 展示の効果

栃尾美術館で行われる長岡ゆかりの作家や作品を紹介する郷土シリーズ企画の中で実施したことで、栃尾地域の人々に「栃尾紬」とその生活文化が地域の大切な遺産であるという認識を広めるための手がかりの一つになったと感じている。また、これらの資料と情報が家族にとっていかに大切なものであるかということを伝える機会にもなった。次の持ち主が決まらずに廃棄される、または行方がわからなくなっていくことが多い中、次の世代に受け継がれるという嬉しい報告もあった。地域の大切な遺産として栃尾の地域で受け継ぎ、守っていくという意識を高めるには多くの課題があり、地域全体で考えていかなければならないが、実際のものを「見てもらう」ことの効果がとても高いことを確認できた。

昨年の展示に加え、栃尾美術館での展示をきっかけに広く情報を集めるという目標はあるが、今回のテーマを「個々の歴史と背景が見える展示」に据えたことで、展示されている資料の系譜が確認できる情報も多く寄せられた。それらは私たちの今後の調査研究の方向を指し示すものであるとともに、資料一つ一つの価値を確かな方向に導く生きた情報である。会期中に美術館に新しく寄せられた情報は 10 件、そのほとんどが展示されている資料と関係が深い織物、素材、書籍、資料や情報を提供したいというものだった。（小林）

2. 調査と活動

2.1 展示資料のための情報収集

展示構成の方針が決定した段階で、展示予定資料一つ一つの背景をさらに確認する必要があった。そのため、これまで調査した織物と養蚕の道具や素材に加え、織り手とその家族の記録、所有者との関係が確認できる写真や紙資料等にも注目し、10件の聞き取り調査を繰り返し行なった。手織りに直接関連する写真は少なかったが、明治～昭和期の養蚕・糸作り・機織りと生活の様子、工業化に向かう当時の人々の様子が記録された様々な資料とエピソードを収集することができた。

fig.9 養蚕の仕事風景（中野俣）

fig.10 アルバム写真（一之貝）

2.2 情報の保存に向けた資料収集と記録

調査を進めるにつれ、栃尾紬にまつわる様々な情報を残すために尽力した人々の存在が見えてきた。そのため、昭和50年代までに刊行された書籍と栃尾町内の施設に道具類が多く保管されていることが確認できた。しかし、残念ながら現在もそれらと織物や素材とのつながりが見られるような状態にはなっていない。栃尾の民俗資料を有効に活用するための保存と管理を行う機関ができる見通しも立たない中で、後世に受け継がれるべき情報が次々と消失している。本研究では何よりも聞き取り調査と資料の記録を急がなければならないが、収集した資料は写真撮影し、映像記録と聞き取り音声記録は文字起こしを行い、地域に残すための情報の作成と記録集の制作のためにデータ保存を進めている。美術館の展示の際に行なった調査と同様の方針で展示期間中に約9件、2022年8月までに約12件の調査を行なった。（小林）

2.3 手織り・糸作りの記録を残すために

栃堀にある貴渡神社[*5]の社殿彫刻には養蚕から機織りまでの様子が生き生きと表現されており、地域の人々によって大切に保存されてきた。これら各地に残る文化財からは栃尾地域に受け継がれてきた技術や文化、制作方法を確認できる可能性があるため視察を行なっている。

fig.11 栃尾の機神様　貴渡神社　左側面彫刻

今では栃尾の糸作り、手織りの作業工程の全てを実際に記録することは困難である。そのため、これまで経験者の記憶を辿り、できるだけ多くの情報を集める調査・活動を行なってきたが、1.2で述べたVHS映像や写真記録のような資料を今後の活動に生かすためにもできる限り経験者による実演を記録したいと考えた。中でも座繰りの工程は今も多くの人の記憶に残っている。中野タケノ氏とご家族の協力により、座繰りの実演映像を記録することができた。（小林）

fig.12 座繰りの実演（一之貝）2021年9月18日

長岡市立栃尾南小学校（以下南小学校）歴史学習教室に展示されている織機（栃尾美術館に展示した）は、経糸が掛けられていたが乱れている状態であった。織機の使用者がご存命である事、一之貝絣が織られていた事から、経糸を一之貝絣に掛け替える事にした。その工程で使用する「しゃち」と呼ばれる道具の使用方法をご本人と地域の方々に見て頂き、確認することが出来た。織機の整備だけではなく、教室全体の整備についても検討している。（菊池）

fig.13 南小学校織機の経糸掛け替え
「しゃち」を使用して経糸巻き　一之貝担い手センター大会議室

fig.14 南小学校織機の経糸掛け替え
大学織物工房に部品を移動して綜絖通し作業を行う

2.4 講演会での活動報告と意見交換

まちなかキャンパス長岡－まちなか大学－における5回連続講座「さわって、みて、織機と布のからくり発見！」内の2回を担当して栃尾地域の繊維産業について講義を行った。その内の1回は栃尾紬を中心に、家内で養蚕から行っていた布作りを実物の反物や端切れを観ながら説明した。2回目は、家内織の栃尾紬が現在の栃尾の繊維産業に繋がっている事を、栃尾織物工業協同組合に所属する工場を紹介し、説明した。受講者には栃尾から通われた方が居り、栃尾紬が家にある情報をもらい後日調査をすることが出来た。また、制作に興味がありやってみたと言う希望が聞かれた。

長岡市地域の宝磨き上げ事業－令和3年度　第1回市民歴史学習会－において「栃尾の手織物と絹文化」の演題で講演を行った。本研究でお預かりしている着物や反物を許可を得て展示し、講演後半は聴衆の皆さんと意見交換を行った。本講演は、長岡市栃尾産業交流センターおりなすで開催されたが、聴衆は栃尾在住の方が中心で、養蚕や手織物制作を記憶されている方が多くおられた。（菊池）

fig.15 第一回市民歴史学習会　長岡市栃尾産業交流センターおりなす

3. 今後の展望と課題

3.1 展望

初年度で寄せられた資料を整理し展示する事と写真で記録する事、新たな情報の聞き取り調査を続けている。コロナ禍に於ける調査は予定通りに進まないもどかしさがあるが、当時を知る人々が高齢であることから調査は急がなくてはならない。制作方法については聞き取りは基本であるが、実際に制作を目前で見てもらい、自由なおしゃべりの中から確認できることが多々あることがわかった。今後は、気軽に集まって頂ける環境を作りながら、制作方法を実地で確認して行きたい。当初の研究方法として考えていなかったが、実際に絹織物を製作しながら製作方法の記録を検討している。

また、この活動は、これまで栃尾の養蚕や絹織物に関心を持つ人々との交流に支えられてきた。今年度は、一之貝の地域の人々の協力で養蚕に挑戦し始めた地域おこし協力隊の方との出会いもあった。今後も地域に根ざした活動を行う人々と連携して記録を進めて行きたい。

3.2 課題

貴重な布や道具などの資料が多数集まっているが、保管場所がない。

ほとんどの資料は「返却されても捨てるだけだから、返さなくても良い」と言われている。貴重な資料である事、素晴らしい布である事を伝えながら、保管方法を地域の人々と見出して行くことが大きな課題である。

栃尾市史別巻Ⅰ P.750に記載されている「田之口の黄縞、森上の無地、栗山沢の黒地、黄格子、黄八丈、荷頃の千筋、赤谷の大柄、中野俣の鼠縞、一之貝の絣」については、一之貝に加え荷頃に証明できる着物を記録することが出来たが、他の地域では記載の特徴がわからない状態である。今後も継続して探して行きたい。

当初は3年計画で始まった研究であるが、コロナ禍で調査が滞った事や多岐にわたる情報と資料の量が多い事、実際に制作しながら制作方法の記録を取ることを行うと記録集の編集には時間が必要である。栃尾の人々は元より長岡市民にとって誇りとなるような記録を作成したい気持ちは募るばかりである。（菊池）

謝辞

貴重な情報をお寄せくださり、快くご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。また、本年も研究にご理解をいただき展示室の使用や情報収集の窓口としてご協力をいただいた長岡市栃尾美術館の皆様にも感謝申し上げます。栃尾の絹織物の素晴らしさを伝える貴重な機会を与えてくださった、まちなか大学、市民歴史学習会、日本繊維工業教育研究会の皆様にも感謝申し上げます。

渡邉カウ様、武士俣邦吉様、五十嵐和雄様の訃報に接し、哀しみに絶えません。丁寧に誠実にお教えいただきました。ご冥福をお祈り致すと共に、改めて御礼を申し上げます。研究で出会う資料からいろいろな声が聞こえてきます。丁寧に真摯に創る喜びに溢れた絹織物を通して、今は亡き栃尾の人々との出会いを幸せに思います。

注釈・参考文献・資料

＊1　栃尾市史編集委員会：栃尾市史下巻、別巻Ⅰ・Ⅱ、1980.1978.1981.
栃尾市：少年少女栃尾の歴史、1983.
土田邦彦：越後の伝統織物、野島出版、1980.
土田邦彦：新潟県織物史、野島出版、1990.
栃尾織物工業協同組合：栃尾と織物、栃尾織物工業協同組合 1968.
栃尾市立一之貝小学校 軽井沢分校：創立百年のあゆみ、1974.
栃尾市立一之貝小学校：私たちの学校と郷土一之貝・軽井沢、1984.
染色と生活社：季刊 染色と生活第15号冬、株式会社染色と生活社、素朴な手織り美「越後・一之貝絣」、1976.
原須賀：実用 裁縫要鑑、帝国心城会、1929.
＊2　機神様（馬鳴菩薩（めみょうぼさつ））の掛け軸：作者・制作年不明、菅畑、五十嵐家
＊3　「蚕から糸つくり、機織りまで（60分）」VHS 撮影：旧一之貝小学校、実演：剣持トシ、茨木ノヤ、1984.
＊4　＊3のDVD短縮版（13分40秒）企画：栃尾の手織物と絹文化研究会、編集・映像補正：公立大学法人長岡造形大学 視覚デザイン学科 上村春香、鈴木ちはる、協力：中野タケノ、2021.7.31.
＊5　貴渡神社（たかのりじんじゃ）社殿彫刻：石川屋安兵衛（号は雲蝶）作、江戸末期、長岡市指定有形文化財、長岡市教育委員会、管理者：栃堀区
1）　栃尾市教育委員会：栃尾の文化財、1984.
2）　石崎忠司：北越織物史雪の中のきれ、文化服装学院、1966.
3）　日本織物新聞社編纂部：増補版染織辞典、日本織物新聞社、1934.

新聞掲載

1）　2021年8月17日新潟日報：織物伝える多彩な技－長岡・栃尾美術館で企画展
2）　2021年10月15日新潟日報 そいがあて10月号：暮らしと共に家族で紡いでとちお手織物と絹文化